松本方言終助詞の文法体系

―談話研究の基礎―

沖　　裕　子

A Description of the Grammatical System of Final Particles in Matsumoto Dialect : The Link between Grammar and Discourse

Hiroko OKI (Shinshu University)

要旨

松本方言終助詞の主要な形式を網羅し、形態、意味、構文の点から記述を行った。終助詞とは、文の末尾に位置して文を完結させる働きをもつ倚辞の一群を指す。終助詞は相互承接が可能であるため、相互に排他的関係をなさない。前接形式から整理すると、概略、名詞に接続でき、かつ活用語終止連体形にも接続できる終助詞（ダ、カ、サ、セ、ズラ、ジャン、ジャネー、ドー）であるＡ類と、名詞には接続できないが、活用語終止連体形に接続できる終助詞（ン、モン、イ、ワ、ゾ、コト、デ、ニ、ガ、ジ､ッテ､ッテバ）であるＢ類、名詞には接続できないが、活用語終止連体形と動詞の命令形／連用命令形に接続できる終助詞（ヨ、ネ、ナ、ヤ）であるＣ類がみられる。後接形式から整理すると、必ず他の終助詞を後接する形式、他の終助詞を後接しうる形式、終助詞を後接できない終助詞に大別される。また、意味的には、話し手の⑴命題に対する評価のしかたと、⑵命題を相手に対して伝えるしかた、という２種のモダリティーを有している。構文的には文末に位置するが、⑴の意味のありかたからみて、文副詞と類似の機能を有している。本論で記述した終助詞の文法体系は、松本方言の表現法を論じる上での基礎となっていく。

キーワード：終助詞　方言終助詞　副詞　モダリティー　文法記述

１．俚言の衰退と表現法の変化

「明日は、雨が降るだろう」ということを実際の生活場面のなかで表現する場合、長野県松本方言では、「アシタワ、雨ズラ」という発話をあまり耳にしなくなった。そのかわりに高年層の発話として比較的広くよく聞かれるのは、「アシタワ、雨ジャネーカイ」という表

現である。ズラという俚言形の衰退に伴って、新たに使われるようになった表現は、共通語の推量形式ダローを用いた「アシタワ、雨ダロー」という表現ではなかったのである[注1]。こうした、「アシタワ、雨ズラ」から、「アシタワ、雨ジャネーカイ」という表現への推移には、推量の文法形式ズラを用いた表現の組み立てから、「ジャネー」「カ」「イ」という複数の終助詞を組み合わせた、表現の組み立て方そのものの変化があったともいえる。

本論では、こうした複数の終助詞の組み合わせによる表現選択への変化を考える前段の研究として、表現を組み立てる形式そのものに焦点をあて、松本方言終助詞の文法体系を、形態・意味・構文の観点から概観し、記述したいと思う。

終助詞の豊かさは、日本語そのものの特徴のひとつにあげられよう。終助詞は、話しことばに用いられることから、話しことば（方言）の終助詞記述は、日本語研究に大きな貢献を成す可能性を秘めている。方言終助詞の意味記述に関しては、主として母方言の内省による井上優氏（富山県砺波郡）の一連の研究（井上優1993、1995、2002等）や、渋谷勝己氏（山形県山形市）の一連の研究（渋谷勝己2001、2003、2004、2005、2008等、文末詞と呼ばれる）のほか、各地方言の終助詞１語をあげて詳細な意味分析を行う研究（佐藤虎男1990、服部匡1995、舩木礼子2001、中村純子2006、白岩広行2008、村中淑子2009、江口正2010他多数）が、次第に蓄積されはじめている。主として文字言語を対象とした共通語終助詞の分析考察は、富樫純一（2004）が編んだ1908年から2003年までの終助詞文献目録で知られるように、諸説が林立している現況である。

これらに対して、１地域の終助詞全体を対象とした体系研究は少なく、馬瀬良雄（1992）など、地誌の方言編として編まれた共時態の記述や、日本語記述文法研究会のように共通語を対象とした記述文法を志向する編著や、品詞論として共通語終助詞を考察する佐治圭三（1957）、渡辺実（1968）などの論考を別として、音声言語（方言）の終助詞を対象に体系的に論じた考察は、管見によれば　丹羽一彌（2003）があるのみであった。丹羽一彌（2003）では、形態論を重視した体系記述を行っており、本論の立場と重なるところがあるが、構文的な考察で大きく異なるところもある。また、同論文の記述対象は、尾鷲市方言、稲沢市方言であるため、言語体系が異なる松本方言とは、終助詞の言語的様相そのものの違いもみられる。

また、終助詞は、話し手の主観を表現する語詞として、談話展開を左右する言語的要因のひとつとなっている。終助詞は、文法的事実でもあり、談話的事実でもある。文法と談話の関係を視野に入れて終助詞を位置づける論には、白岩広行（2011）、沖裕子（2009b、2013a、2014）などがあるが、この分野の研究は、まだこれからであるといえよう。

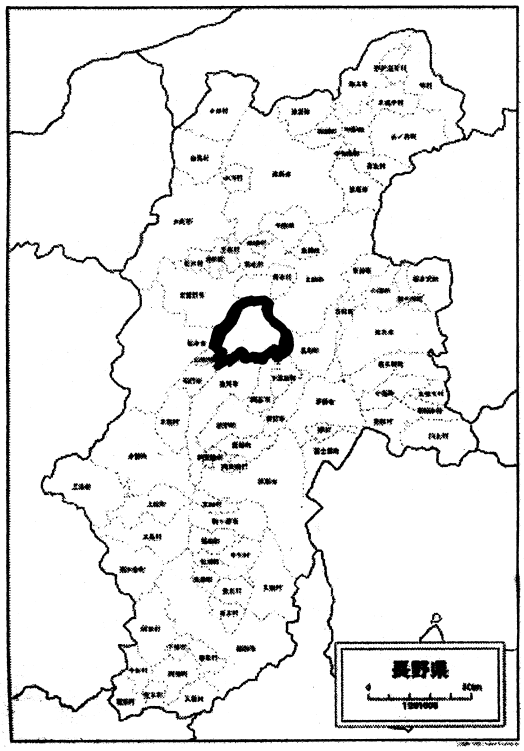
本論でいう松本方言は、平成17年合併前の旧松本市辺で使用されていることばを指して用いる。（2014年現在の松本市は、合併以前の松本市、四賀村、梓村、波田町、奈川村、安曇村を合わせて成立している。）地理的には、図１の太枠で囲んだ地域である。松本方言は、本州東部方言のナヤシ方言に属する。アクセントは東京式で、語彙的には、共通語との一致率が高い。文法的にはおおむね東部方言の特徴を示すが、否定辞は「ナイ」を用いつつ「ン」の弱い併用がみられるなど、西部方言的特徴も一部みられる（馬瀬良雄1992参照）。

また、分析にあたる論者は、18歳まで松本市内で生育し、その後20年間当地を出たあと、再び松本市内に居住して21年間を過ごしている[注2]。分析のための資料は、自然傍受法によ

る聞き取り、面接による聞き取り調査のほか、文章資料および論者の内省を援用して行う。方言には、世代差も個人差もある。著しく使用集団に偏りがあったり、著しく自然さを欠く用例は採取しておらず、また、そうした表現を作例していないつもりではあるが、方言の用例（使用の実態）はゆれを含んでいるため、さらに調査を重ねたい[注3]。

形態論の考え方は、宮岡伯人（2002）に従う。用例は、読みやすさを考慮し、音韻記号／／のかわりに「　」を用いて示す。共通語の用例は漢字平仮名交じり文で記し、松本方言の言語資料は、「　」に入れて簡易音韻表記で示し、時に漢字を交えて記す。

イントネーションによって、発話の意味が異なることがあるが、本論では、イントネーションは、考察の対象外におく。イントネーションは、アクセントのように語に付帯する所与の単位とは異なり、イントネーション文法に従いながら話し手が選択的に実現していく単位であると考えている。そのため、語義とは別のレベルの現象ととらえるからである（沖裕子2013a、沖裕子2013b 参照）。



【図１】平成大合併以前の長野県松本市の位置（太線で囲んだ部分）

２．終助詞に対する本論の文法的立場

終助詞とは、文の末尾に位置して文を完結させる働きをもつ倚辞の一群を指す。これらの倚辞は、相互に承接することが特徴である。たとえば、「行クサネ（行くよね）」では、動詞「行く」に後接した「サ」「ネ」が終助詞であるが、それらは相互に承接することができ、排

他的関係をなさない。東京語を母体とした現代共通語（以後、共通語と略述）においては、たとえば「行くよね」にみられるように、「よ」「ね」という倚辞が相互に承接して排他的関係をなさないことと同様である。

排他的関係に立たないということは、これらの形式がひとつの文法的範疇をなしているというよりは、語的な性質を有した語詞群であることを示している。このことは日本語にあって、めずらしいことではない。1例をあげれば、共通語で格助詞（が、を、に、へ、と、より、から、で）は、ひとつの文法的範疇を成しているため、若干の例外はあるものの（「東京へと、旅立った」）、基本的に相互に排他的関係をなしているが、それに対して、副助詞（も、まで、さえ、とも、だけ等）は、「ロンドンまでさえも、短時間で行ける。」などのように、語詞を重ねることができ、排他的関係には立たない。しかし、だからといって、副助詞は類をなさないわけではなく、文の成分を副詞的働きに転換するという共通した文法的性質を有していることに注目すると、一類をなすともいえるのである。

終助詞類において相互承接が可能な事実に注目すると、終助詞に分類される語詞は、むしろ一語一語が語彙的な性格を有していると考えられる。したがって、終助詞の記述には、各語が有する独自の意味に注目することが重要になると考える。この点で、相互承接における排他的関係を重視し、終助詞と文末詞を階層的に別のカテゴリーに属するとして峻別する丹羽一彌（2013）とは、立場が異なっている。

終助詞は、構文的には先に述べたように、「文の末尾に位置して文を完結させる働きをもつ」と定義できるが、これらの倚辞は、語義的にも共通する点がある。それは、その文の命題に対する話し手の捉え方を示していることである。命題と終助詞との意味的関係のありかたは、文副詞の働きと類似している（宮岡伯人2002、沖裕子2013）。文副詞は、「幸い、事故に合わなかった。」「からくも、逃げおおせた。」などのように、文の命題内容全体を修飾している。日本語では修飾語は被修飾語の前に置かれるため、終助詞は文法的には修飾の働きをもたないことは言うまでもないが、命題と語詞の意味的関係に注目したときに、命題内容全体に対する話し手の見方（評価のしかた）を示しているという点で、文副詞との構文上の意味のありかたの類似性が指摘されるのである。

終助詞は、意味的には、命題に対する話し手の捉え方を示す語詞であり、かつ、文末に位置して文を完結させる働きがあることから、文成立にかかわるムード性を担う語詞でもある。しかしながら、ムードという術語は、活用語の活用体系に組み入れられた、活用語尾の意味的ありかたを指すことが第1義であり、命題を時と場所（相手との関係）のなかに位置づける働きを指して用いられることから、終助詞や文副詞の語義が有する事象を指すには適当ではないともいえるかもしれない。そこで、語義のなかに話し手の評価的捉え方を含んでいる場合、これをモダリティーと呼んで区別したい（益岡隆志1991）。ちなみに、日本語において、モダリティーを有した語詞は、終助詞だけではなく、副詞、副助詞や、接続詞など、広く見られる。

モダリティーという、語のもつ意味的側面に注目すると、終助詞は、その文の命題に対する話し手の評価的態度を示しているということができる。さらに、命題をどのように対他的に伝えるかという伝達態度の示し方もその語義には含まれている。近年の共通語を対象とした文法研究では、対他的意味に特に焦点があてられることが多いようであるが、終助詞の意

味記述においては、話し手の命題に対する評価的意味の側面があることを忘れてはならないと考える。

3．形態的特徴からみた松本方言終助詞

3．1　接続からみた松本方言終助詞

松本方言の主要な終助詞類を、ここに網羅的にあげてみたい。その際に、接続形式の点から整理して示したものが**表 1** である。すでに述べてきたが、終助詞類は、相互に接続が可能である。そのため、前接形式と、後接形式の双方に留意して整理したものである。終助詞は、他品詞からの転成によって成立したものも多く、共時態の分析では、終助詞と認めるかどうか、理論的にも、また個人差のある使用実態の点からも、判断に迷う場合がある。主要な、と付言するのは、終助詞用法が安定したと認められる形式をとりあげていることによっている。

【表 1】接続形式からみた主要な松本方言終助詞の分類

前接形式＼後接形式		後接終助詞を必ずとる（終助詞化不完了）	後接終助詞をとれる	後接終助詞をとらない
名詞にも、活用語終止連体形にも直接接続できる（過去形に接続する）	一部の終助詞に接続できる		ダ、カ△、サ、セ、ズラ、 ジャン、ジャネー	ドー
名詞に直接接続できないが、活用語終止連体形に直接接続できる（過去形に接続する）	一部の終助詞に接続できる	ン、モン	イ△△、ワ、ゾ、 コト、ッテ、 デ、ニ、ガ	ジ、 ッテバ
名詞に直接接続できないが、活用語終止連体形に直接接続できる。（過去形、命令形 ++ もしくは連用命令形＋に接続する）	一部の終助詞に接続できる		ヨ（++）	ネ（+）、 ナ（+） ヤ（++）

△ 名詞にも、活用語終止連体形にも直接接続できる。（過去形、志向形 V-zu に接続する。）
△△名詞に直接接続できないが、形容詞以外の活用語終止連体形に直接接続できる。（過去形、志向形 V-zu に接続する。）

活用語の終止連体形は、コトをモノ的に差し出す形式であって、意味的性質は名詞と相同である。そのため、名詞に直接接続できることと、活用語の終止連体形に直接接続できることとは連続的である。この点で、松本方言の終助詞の分布をみると、**表 1** のように、名詞に後接できる終助詞類は活用語の終止連体形にも後接できるが、その逆の場合はなく、終助詞

の名詞形への後接と終止連体形への後接には、階層差があることがわかる。なお、終助詞はすべて、活用語の過去形には例外なく接続する。こうした基本的な特徴に加えて、命令形もしくは連用命令形（松本方言にみられるやわらかな命令を担う形式）に接続する終助詞と、志向形にも接続する終助詞があることになる。後者は、別に欄を立て、「名詞にも、活用語終止連体形にも直接接続できる（過去形、志向形 V-zu に接続する）・一部の終助詞に接続できる」という欄に「カ」を、「名詞に直接接続できないが、活用語終止連体形に直接接続できる（過去形、志向形 V-zu に接続する）・一部の終助詞に接続できる」という欄に「イ」を位置付けるべきでもあるが、意味的な連続性を考慮して、「△」「△△」によって注釈を付して分類する方法をとった。なお、「イ」は、活用語のうち、形容詞には直接後接しない（「＊痛イイ」「＊寒イイ」）。しかし、他の終助詞を介せば共起できる（「足ガ痛イダイネ（足が痛いのですよ）」「外ワ寒イカイ（外は寒いかね）」「外ワ寒イズライ（外は寒いでしょうね）」）。論者は確認していないが、馬瀬良雄（1992）の用例によると形容詞型の接辞には後接可能（「フントニ　アリガテーイネ（本当にありがたいですよ）」）。

松本方言の志向形は、「行カズ（行こう）」が高年層に使用される。動詞志向形には「行コー（行こう）」という共通語化した形式もみられるが、勧誘、意志表現では、その使用は活発ではない。「行コー（行こう）」「起キヨー（起きよう）」よりは、「行クヨ（行こう）」（勧誘表現）「起キルカ（起きよう）」（意志表現）など、動詞終止連体形に終助詞を後接させた表現の方がよく使用されるように思う（沖裕子2007）。談話表現レベルの気づかれにくい方言といえよう。

3．2　終助詞間の相互承接からみた松本方言終助詞

表 1 にあげた松本方言の終助詞相互の承接を、一覧表にして示したのが、**表 2** である。縦軸と横軸に終助詞類をマトリックスにして示した。縦軸に示した終助詞を前項として、横軸に置いた終助詞が、直接後接できる場合に○印で示したものである。**表 2** の読みかたは、次のようになる。

たとえば、「カ」には、○印を付した「ヤ」「イ」「ネ」「ナ」が後接できる。これらのうち、「ヤ」「ネ」「ナ」についてさらに縦軸をみると、これらは終助詞を後接しないため、「カヤ」「カネ」「カナ」という表現があることになる。また、「イ」について縦軸をみると、「イ」は「ネ」を後接しうるため、「カイネ」という表現があることになる。**表 2** は、日常生活のなかで使用頻度が高く耳にしやすい表現を示すためのものではなく、相互承接を文法的に示すためのものである。

表 2 にまとめたところをみる限り、松本方言終助詞間の相互承接には、終助詞を必ず後接する形式と、終助詞をさらに後接できる形式、そして終助詞を後接できない形式という 3 分類を成すものの、順序性に関してそれ以上の明確な階層性がみられないことが分かる。このことからも終助詞の語詞性が窺われる。

4．松本方言終助詞の語義について

表 1、**表 2** にあげた終助詞の語義について、若干の説明を加えておきたい。

【表２】松本方言終助詞間の相互承接

前＼後	ン	モン	ダ	カ	サ	セ	ズラ	ジャン	ジャネ―	ド―	イ	ワ	ゾ	コト	ッテ	デ	ニ	ガ	ジ	ッテバ	ヨ	ネ	ナ	ヤ	
ン	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	○	―	―	
モン	―	―	○	○	○	○	―	○	○	○	―	―	―	―		○	―	―	―	―	―	―	―	―	注１）
ダ	○	○	○	○	―	―	―	―	―	―	○	○	○	―		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
カ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	○	―	―	―		―	―	―	―	―	―	○	○	○	
サ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	○	○	○	
セ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	―	―	○	
ズラ	―	―	―	○	―	―	―	―	―	―	○	―	―	―		○	○	○	―	―	―	○	○	―	
ジャン	―	―	―	○	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	○	○	―	
ジャネ―	○	―	○	○	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	―	―	―	注２）
ド―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	―	―	―	
イ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	○	―	―	
ワ	―	―	―	―	○	―	―	―	―	―	○	―	―	―		―	―	―	―	―	―	○	○	―	
ゾ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	○	―	―	―	
コト	―	―	―	○	○	○	○	○	○	○	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	―	―	―	
ッテ	―	○	―	―	○	○	―	○	―	―	―	―	○	○	―	―	―	―	○	―	○	○	○	―	
デ	―	―	―	―	○	○	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	○	○	―	注３）
ニ	―	―	―	―	○	○	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	○	○	―	注４）
ガ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	○	○	―	注５）
ジ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	―	―	―	
ッテバ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	―	―	―	
ヨ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	○	○	―	
ネ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	―	―	―	
ナ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	―	―	―	
ヤ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	―	―	―	

注１）モンに終助詞が後接する場合、モンが形式名詞か終助詞かは判断が困難な場合がある。
注２）ジャ＝ネ―（否定）の接続とは異なる
注３）格助詞・接続助詞デの接続とは異なる。しかし、後接終助詞がある場合、接続助詞との区別がつけにくい。
注４）格助詞・接続助詞ニの接続とは異なる。しかし、後接終助詞がある場合、接続助詞との区別がつけにくい。
注５）格助詞・接続助詞ガの接続とは異なる。しかし、後接終助詞がある場合、接続助詞との区別がつけにくい。

まず、「**ン、モン**」については、必ず他の終助詞を後接するため、「文の末尾に位置して文を完結させる働き」がなく、典型的な終助詞とはいえないものである。「モン」については、「デ」を続けて「モンデ」として文を完結させることが多く、「モン」で文を完結させることが一般的かどうか判断が難しい。ただし、人によっては「モン」で切ることもあるので、表中に入れた。「ン」については、次に述べるように、終助詞「イ」と用法の重なりがあり、類義の関係に立っている。「イ」は、「ドコ、行クイ（どこに行くのですか）」「ソーカイ（そうですか）」「ソーズライ（そうでしょうね）」などのように、文の末尾に位置して、文を完結される働きをもっているため、典型的な終助詞のひとつである。

ちなみに、「**ン**」と「**イ**」が類義であるとは、次のようなことを指している。用例をあげて説明したい（沖裕子2009参照）。

(1) アレワ、ガスダンネ。（あれは、ガスですよ。）
　　アレワ、ガスダイネ。（あれは、ガスですよ。）
(2) マダ、ヒル、タベテネーダンネ。（まだ、昼ご飯を食べてないんですよ。）
　　マダ、ヒル、タベテネーダイネ。（まだ、昼ご飯を食べてないんですよ。）

「ン」と「イ」は、(1)(2)のように、同じ文脈で使用されるが、その意味が異なる。「ン」を使用する場合は、「アレワ、ガスダ」ということ（＝命題内容）を＜話し手が事実だと考えていること＞として述べているが、「イ」を使用する場合は、命題内容を＜話し手が気づいていること＞として述べている。命題内容に対する話し手の事態把握を、＜事実の提示＞「ン」と、＜気づきの提示＞「イ」で言い分けて示しているのである。そのため、次の(3)(4)のように、事実として淡々と語るような談話では「ン」を用い、気づきを述べて意見を展開していくような談話では「イ」を用いることになる[注4]。（　）内は共通語訳であるが、「ン」「イ」に対応する形式が共通語にはないため、意訳を工夫してみた。

(3) ニンゲンドックワ、イーダンネ。マー、ウケテミマショ。ワリートコナンカ、タイガイ、イッカイデ、ワカッチマウジ。（人間ドックは、客観的にみて、よいですよ。まあ、受けてみてください。悪いところなど、大体、一回で分かってしまいますよ。）
(4) ニンゲンドックワ、イーダイネ。トクニ、ジカンノナイヒトナンカ、イージャナイダ。シモ、ホジョキンダシテクレルシ、マー、イーコトワワカッテルデ、オレモ、ウケナキャトワオモッテルダガ。（人間ドックは、よいに違いないですよ。特に、時間のない人には、よいのではありませんか。市も補助金を出してくれるし、まあ、よいことは分かっているので、私も受けなければと思っているのですが。）

終助詞をどのように用いるかは、表現の形成において重要な働きをもっている。(1)から(4)のほかにも用例をあげれば、次の(5)(6)のように「昼飯を食べていない」ことに言及する場合にも、自分から切り出す場合には、「ン」を使用して事実として持ち出して話題を展開していくが、相手の挨拶的な質問に答える場合には、それに気づいていることを示す「イ」を用いて、切り口上な事実確認の返答を避けるなど、談話展開上の表現の工夫がみられる。

(5) A「マダ、ヒル、タベテネーダンネ。ハラヘッチマッテサ。
　　（まだ、昼飯を食べてないんですよ。おなかが減ってしまってね。」
　　B「ソーカイ。ソリャ、イケネーネ。

（そうですか。それは、いけないですね。）」

(6) A「モー、ヒル、タベタダ。（もう、昼飯、食べたのですか）」
B「マダ、タベテネーダイネ。ソッチワ、モー、スンダ。（（いろいろあって）まだ、食べてないのですよ。そちらは、もう、すみましたか。）」
A「イヤ、コレカラセ。（いや、これからですよ。）」
B「ソーカイ。オタガイニイソガシーネー。（そうですか。お互いに忙しいですね。）」

「**ダ**」は断定判断、「**ズラ**」は推量判断、「**カ**」は疑念判断、「**サ**」「**セ**」は確定判断を表す。「ズラ」は、「ダ」と同様、終助詞として考える（後述）。また、「**サ**」と「**セ**」は、待遇的意味に異なりがある。「サ」は同輩・目下に用いるのに対し、「セ」はやや目上に対して用いる。

「**ジャン**」「**ジャネー**（長音は、半拍程度の長さであることもある）」は、全体でひとつの形態素であり、かつ、松本方言の共時態では別語であって意味的に異なっている（ちなみに、松本方言は、ダの分布地域であり、ジャを使用しないことは、先に述べた通りである）。「ジャン」は推量を経た確定判断、「ジャネー」は疑念を有した確定判断を表す。動詞に直接接続するジャンは、談話全体の意味が「エーガ、イクジャン（映画、行こう）」のように勧誘の場合と、「アノヒト、エーガ、イクジャン（あのひとは、映画に行くよ）」のように、推量を経た確定判断の場合がある（伝聞推量を経た確定判断は、「アノヒト、エーガ、イクッテジャン（あのひとは、映画に行くそうだね）」）。

「**ドー**」は、「ダワ」の融合形であると考える。

「**イ**」は、「行クカイ」「ソーカイ」「ソーズライ」などのように、文の末尾に位置することもでき、「ソーダイネ」などのように終助詞を後接させることもできる。意味は、前述したように、気づきの提示を表す。

「**ワ**」は、「ハ［ナ］ダ］ワ」「イ［ク］ワ」などのように使用される（［］は、ピッチの上下を示す）。ワは、確信の提示を表す。

「**ゾ**」と「**ジ**」は、意味的にも、待遇的意味にも異なりがある。「ゾ」は同輩・目下に対して用いるのに対し、「ジ」はやや目上に対して用いる。「ゾ」は、「起キルゾ」のように自分自身に対しても用いることができるが、「起キルジ」は自分自身への働きかけには用いられず、他者に対する働きかけにのみ使用される。「ジ」は、「ゾイ」の融合形である可能性がある。

「**コト**」は、形式名詞からの転成であるが、「オレガ行クッテコト（私が行くということ）」「オレガ行クッテコトセ（私が行くということですよ）」のように使用され、引用の「ッテ（という）」を介して、既定判断の提示を表す。

「**ッテ**」は、「トテ」から転成したものであろうが、終助詞化し、「オレガ、行クッテ（私が行くって）」「ソンナン、シナンダッテ（そのようなことを、しなくても）」「ソンナン、シネータッテ（そのようなことを、しなくても）」などのように、主張を表す。

「**デ**」「**ニ**」「**ガ**」は、格助詞としても接続助詞としても使用され、接続助詞が転成して終助詞となった。松本方言では、「**デ**」は、格助詞の用法（「学校デ、待ッテロヨ（学校で、待っていろよ）」のみならず、接続助詞としての使用が活発であり、「ソッチエ行クデ、待ッテマショ。（そちらへ行くから、まっていて）」などのように使用される。これが転じて、

「今カラ帰ルデネ。タクシー使ッテ、帰ルデ。（今から帰るからね。タクシー使って帰るから）」などのように、文末に位置して文を完結されることができる終助詞となった。

また、「**ニ**」は、全般に「デ」ほどは使用されないが、デと同様に格助詞としても接続助詞としても使用され、さらに文末に位置して文を終止させることができる。「東京ニイクワ（東京に行くよ）（格助詞）」「サッキ、トビックラヤッテタニ、モー、ダレモイネー。（さっき、運動会していたのに、もう誰もいない）（接続助詞）」「アレ、留守カヤ。ヤクヤク来タニ。（あれ、留守かな。はるばる来たのに）（終助詞）」

「**ガ**」は共通語にも同様の形式があるが、松本方言では接続助詞としての使用頻度が高いことが特徴的である。接続助詞としては、「阿部知事ワ、県立大学構想ヲイッショーケンメーススメテルガ、ドーダジ。（阿部知事は、県立大学構想を一所懸命に進めているが、どうですか）」などのように使用されるが、終助詞としても用いられる（「ソーイウコトナラ、オレ、イクガ。（そういうことなら、私が行きますが）」）。

「**ッテバ**」は、「アレワ、花ダッテバ」「オレガ、行クッテバ」など、他者に対する主張の強調を表す。「ッテバ」はそれ以上切れず、1語である。

「**ヨ**」「**ネ**」「**ナ**」は、名詞、活用語終止連体形に接続できるだけではなく、命令形もしくは連用命令形にも接続する。「ヨ」は、「ハーク行ケヨ（早く行けよ）」などのように命令形に、また、「ネ」「ナ」は、松本方言にある、やわらかい命令としての連用命令形（「ハーク行キ（早く行きなさい）」「ハーク起キ／起キリ（早く起きなさい）」など）に後接し、「ハーク行キネ」「ハーク起キ（起キリ）ネ」「ハーク行キナ」「ハーク起キナ」などとなる。また、「ヨ」は、「コレ、花ダヨネ」などのように終助詞を後接できるが、「ネ」「ナ」はいかなる語詞も後接しない。また、「ネ」「ヨ」は、共通語（の女性語）では名詞に直接接続できるが、松本方言にはそうした用法はみられず、共通語とは異なった姿が認められる。

「ナ」については、次のようなことがいえる。たとえば、「ゼンブ、食［ベ］ル［[ナ（上昇調）」のように、活用語の終止連体形に後接する場合、「ゼンブ、食ベル」は、「オ茶！」「メシ！」などのような名詞1語文の命令談話と同様、相手への命令的対他的ムードを帯びている。場面のなかで音声が付帯して発話された場合、「ゼンブ、食［ベ］ル［[ナ（上昇調）」は、相手への念押しの意味があらわれるが、これは、「ナ」が、述語の持つムード性を容認しつつ命題内容を自他に差し出す語詞であるからだと考えられる。命題内容が変化すると、たとえば、「オレ、食［ベ］ル［ナ（平調）」では、「オレ、食ベル」は意志性のムードを帯びており、これに「ナ」が後接して、命題内容の意志性を容認しつつ自他に提示する意味になる。（ちなみに、「おれが食べるから、お前は食べなくてもよい」などの含意は、場面のなかで生じる運用的意味である。）また、「（この子は）ゼンブ、食［ベ］ル［ナ（平調）」では、観察結果の相手への宣言の意味があらわれてくるが、この「ゼンブ、食ベル」は、命令や意志のムードは帯びていず、描写であり、これに「ナ」が後接したと考えられる。発話からイントネーションの意味、文意、場面情報を引き去って「ナ」そのものの語義を求めれば、述語の帯びたムード性を容認しながら命題内容を自他に提示する、という意味が抽出される。（なお、下降調で表現される「ゼンブ、食［ベ］ル］ナ」の「ナ」は、禁止の「ナ」で、別語である。「ナ」は、「ゼンブ、食ベル」という文全体を否定する意味を有している。この「ナ」は、命題内容の知的意味を変換するため、終助詞とは考えない。）

「ヨ」は、述語の帯びたムード性を強化しながら命題内容を相手に提示し、「ネ」は、述語の帯びたムード性を容認しながら命題内容を相手に提示し、「ナ」は、述語の帯びたムード性を容認しながら命題内容を自他に提示する。ちなみに、「コレ、時計ダヨ」「コレ、時計ジャンネ」「コレ、時計ズラナ」など、「ダ」「ジャン」「ズラ」などの判断に関わる終助詞群に後接することができるが、この場合も、それらの終助詞がもつ判断を、「ヨ」「ネ」「ナ」が評価しながら提示している。

「**ヤ**」は、命令形に後接する。用言複合体全体は、次のように勧誘として使用され、動詞命令形の有するムードをやわらげて提示していることがわかる。

(7)　ハヤク、イケヤ。(早く行こうよ。)

(8)　イッショニ、タベロヤ。(一緒に食べようよ。)

活用語の終止連体形に直接接続する場合は、(9)(10)のように、疑問詞とともに使用される。また、命題に終助詞を介して後接する場合、「ヤ」が後接できる終助詞は「ダ、カ、サ、セ」である。「ダ、カ、サ、セ」は、上述したように、名詞に直接後接可能な終助詞で、命題評価（判断）に強くかかわっている。また、「ヤ」は、そこで必ず文を完結し、それ以降、いかなる形態素もとらない。

(9)　ドコ、イクヤ。(どこへ行くの。)

(10)　ドコ、イッタヤ。(どこへ行ったの。)

(11)　ドコ　イクダヤ。(どこへ行くのですか。)

(12)　イマ、ナンジダヤ。(今、何時だろう。)

(13)　アレ、ソーカヤ。(あれ、そうですか。)

(14)　ソリャ、ソーサヤ。(それはそうですよ。)

(15)　ソリャ、ソーセヤ。(それはそうですよ。)

(7)から(15)までの用法をみると、「ヤ」は、述語の帯びたムード性をやわらげながら、命題内容を相手に働きかける語詞であることが分かる。

5.「ダ」の位置づけに関する本論の文法的立場

松本方言の「ダ」「ズラ」という形式を、本論では終助詞として分類した。「ズラ」は、共通語でいえば「だろう」にあたる言い方であるが、「だろう」は、「不変化助動詞」などという名称で活用の体系からはずす考え方もすでにあり、また、形態論の面からは倚辞であることがすでに指摘されている（宮岡伯人2002)。「ズラ」は形態的には倚辞であり、これを終助詞とするかどうかは、終助詞の定義いかんによるであろう。本論では、判断という意義の面で、「ダ」「カ」「サ」「セ」などと同類の終助詞と認めるものである。

松本方言の「ダ」の文法的位置づけについて、次に述べていく[注5]。

松本方言では、動詞終止連体形に「ダ」を直接後接することができる点が、東京語を母体とした現代共通語（以後、共通語と略述）との相違点である。この接続形態から、松本方言には、共通語の「のだ」に当たる形式がないようにみえる。共通語の「宿題をするの」「宿題をするのだ」に当たる形式は、松本方面では「宿題スルダ」であり、「どこにあるの？」「どこにあるのだ？」に当たる形式は「ドコニアルダ？」である。

ちなみに、松本方言には、「宿題スル」「ドコニアル？」というように、動詞で終止させる用法もある。また、共通語の「の」にあたる「ン」という形式も有している。しかし、共通語とは異なり、「ン」で文を完結することはできず、「ンネ」など、他の終助詞を必ず後接して使用されるため、「ン」は完全な終助詞とはいえない。ただし、「行クンネ」のほかに、「行ク」と「ン」の間に他の倚辞を挿入した「行クダンネ」が言えることから、「ン」は、接辞ではなく、倚辞である。また、すでに述べたように、「ン」は意味的に＜命題が事実であることを示す＞という限定された特徴的な用法をもち、意味的にも、共通語とは異なっている。

こうした事実をふまえて、松本方言体系のなかで、「ダ」の文法的位置づけを考察しておきたい。結論を示せば、松本方言のダは、本論では、命題評価を担う終助詞のひとつと考える。終助詞に分類される形式の形態素種別は倚辞であるが、ダは、「＝ダッ−タ、＝ダ」というように活用し、倚辞ではあっても活用する点だけが他の終助詞と形態面で異なっている。

さて、松本方言のダは、名詞に直接接続するとともに、「食ベルダ」「食ベナイダ」「食ベタイダ」「痛イダ」「丈夫ダダ」「梅ダダ」というように、活用する形式の終止連体形に後接する。また、「食ベタダ」「食ベナカッタダ」「食ベタカッタダ」「痛カッタダ」「丈夫ダッタダ」というように活用語の過去形に後接することもできる。すなわち、それが活用形式であれば、語形変化部分が、活用語尾（食ベ−ル」「痛−イ」「食ベ−タ」）や、接辞あるいは拡張活用語尾（「食ベ−ナイ」）、倚辞（「丈夫＝ダ」「梅＝ダ」）かを問わず、すなわち形態素種別を問わず、活用形式の終止連体形および過去形に続けることができるのである（注6）。

ちなみに、名詞への後接は、「梅ダ」「梅ダダ」「梅ダッタダ」のようになるが、それでは、「梅ダ」の「ダ」をどう考えたらよいのであろうか。また、「丈夫ダ」のような（いわゆる形容動詞の）「ダ」は、どう考えたらよいのだろうか。

そもそも、名詞文が文法的に繋辞（コピュラ）を必ず必要とするわけではなく、「コレ、梅。」のような文でも１文として完結し、「ダ」は無くとも名詞述語文と考えることができる（注7）。そのことをふまえれば、「コレ、梅」ではなく、「コレ、梅ダ」のように「ダ」が明示される場合には、何らかの理由があってのことと考えられる。それはなにかといえば、「〔〔コレ（ガ）、梅〕ダ〕」「〔〔コレ（ワ、杏デワナク）、梅〕ダ〕」というように、「コレ」と「梅」という指されるものと指すものについて、話し手が両者を関係づけて示しているという評価的態度の言語的明示化である。話し手が両者の関係づけをどうとらえているかを示している点で、「ダ」は、話し手の主観的評価としての判断を示すモダリティーの働きを有していると考えられるのである。

ちなみに、「ダ」がいわゆる終助詞とは別種とされてきた理由は、「ダ」が活用するという形態上の点にありそうである。歴史的に、「ダ」は「デアル」という動詞から形成されたことからすれば、「ダ」が「ダッタ」という語形変化を有していることは当然であるともいえる。「ダ」が活用するという点で別種とするよりは、現代松本方言の共通態における形態素種別およびその構文、意味的性格から総合的にみて、本論では、「ダ」を終助詞に分類したい（注8）。命題に対する話し手の判断のありかたは、ダだけではなく、種々の語詞によって担われていると考え、ダ、カ、サなどの終助詞類が、語的な異なりを示しながら担っていると考えるのである（注9）。また、「梅ダダ」「梅ダッタダ」というように、ダが重なっていること

は、ダの相互承接（この場合は重用）であると考える。「梅ダダ」は、「梅」に対してダで判断を加え、さらに「梅ダ」と判断を加えたことに対してダで判断を再び加えた表現と考えるのである。「梅ダッタダ」も同様である。「梅ダッタ」は、「梅ダ」という判断を時制の中へも位置づける表現である。ここに、さらにダという判断を加えていると考えるものである。「梅ダヨネ」なども、終助詞が相互承接しているが、構文的には、「〔〔梅〕ダ〕」という判断を加え、「〔〔梅〕ダ〕」という判断に対して「〔〔〔梅〕ダ〕ヨ〕」という判断を加え、「〔〔〔〔梅〕ダ〕ヨ〕」という判断に対して「〔〔〔〔〔梅〕ダ〕ヨ〕ネ〕」という判断を、入れ子型に加えていると考えるものである（沖裕子2013）。「コレ、梅ダカヤ」というように、「ダ」「カ」という判断の終助詞を重用することもできる。

なお、「立派ダ」「健康ダ」「キレーダ」などの、いわゆる形容動詞も同様に考える。共通語では、終止連体形が「立派な人」「健康な人」「きれいな人」となることを考慮し、語形変化するとみて、「立派だ」などが全体で１語とみる立場もあろうが、「立派」という形容名詞（状態性の名詞）と名詞「人」を修飾的に結び付ける場合に、「な」という倚辞が介在すると本論では考え、本論では、形容動詞をたてない。松本方言でも同様に考える。このとき、「ナ」は、「ダ」の活用形とはせず、名詞と名詞を結ぶ倚辞であって、「ノ」と「ナ」は、形態的な変異形と考える。古代では、「沖つ白波」の「つ」、「毛だもの＜獣＞」「木（く）だもの＜果物＞」の「だ」などが、名詞と名詞を結ぶ倚辞としてあったことが知られているが、「ノ」「ナ」は、そうした、名詞と名詞を結ぶ場合の倚辞の変異形としてあると記述するものである。つまりは、「ナ」は、「デ」の語形変化ではないと考える[注10]。

６．松本方言終助詞の文法体系

以上述べてきたことから観察される、主として接続様態から観察した松本方言終助詞の文法体系について、結果をまとめておきたい。

前接形式からみると、次のように分類できる。なお、松本方言終助詞は、活用語過去形には例外なく後接する。

Ａ名詞可能・終止連体形可能・終助詞可能：ダ、カ、サ、セ、ズラ、ジャン、ジャネー、ドー

Ｂ名詞不可・終止連体形可能・終助詞可能：ン、モン、イ、ワ、ゾ、コト、ッテ、デ、ニ、ガ、ジ、ッテバ

Ｃ名詞不可・終止連体形可能・命令形可能・終助詞可能：ヨ、ネ、ナ、ヤ

後接終助詞からみると、次のように分類できる。

Ｄ後接終助詞を必ずとる：ン、モン

Ｅ後接終助詞をとれる：ダ、カ、サ、セ、ズラ、ジャン、ジャネー、イ、ワ、ゾ、コト、ッテ、デ、ニ、ガ

Ｆ後接終助詞をとらない：ドー、ジ、ッテバ、ネ、ナ、ヤ

このようにしてみると、次のようなことに気づく。

名詞にも後接できる終助詞は、「ダ、カ、サ、セ、ズラ、ジャン、ジャネー、ドー」である。これらＡ類の終助詞は、命題内容に対する判断の評価的態度を、明確に語義として有し、

加えて対他的態度を担っている終助詞であると考えられる。

名詞に後接しない終助詞のうち「ン、モン、イ、ワ、ゾ、コト、デ、ニ、ガ、ジ、ッテ、ッテバ」をみると、これらＢ類のなかで、「ン、モン、コト」は、形式名詞からの転成であることから、形態的理由により、名詞後接ができないと説明される。しかし、それ以外の終助詞「ワ、ゾ、ジ、ッテ、ッテバ」が名詞に接続できないのは、何等かの意味的理由のあることが推察される。これらＢ類の終助詞は、命題内容に対する判断以外の評価的態度を担い、加えて対他的態度（自己に対する態度も含めて）を担っている終助詞であると考えられる。

名詞に後接せず、活用語終止連体形のほかに、動詞命令形／連用命令形にも後接できる終助詞は、「ヨ、ネ、ナ、ヤ」である。これらＣ類の終助詞は、相手への対他的ムードを有した述語に後接できることから、述語を含んだ命題部分が有している対他的ムードに対しての評価的態度を担い、加えて対他的態度（自己に対する態度も含めて）を、担っている終助詞であると考えられる。

Ａ類の「カ」、Ｂ類の「イ」は、動詞志向形にも後接できるため、それぞれ、Ａ類＋Ｃ類、Ｂ類＋Ｃ類の意味を有しているものと考えられる。

７．おわりに

以上、本論では、松本方言終助詞の文法体系について、形態、意味、構文の点から概観し、記述考察した。今後は、本論で割愛した各語の意味分析の過程を示しながら、表現形成との関連性を問う研究へと発展させることになるが、ひとまず稿をとじる。

【謝辞】本論は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究Ｃ「発想と表現からみる日本語談話の対照談話論的研究」（2012～2014年、課題番号24520498、研究代表者　沖裕子）の成果の一部である。ご協力くださいました話者の皆様には、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

【注】

（注１）「アシタワ、雨ジャネーカイ」は、現在、高年層によく使用されている表現である。ただし、もう１世代前にも、「アシタワ、雨ジャネーカイ」という表現が、「明日は、雨ズラ」などの推量の文法形式を用いた表現と併用されていたかどうかは不明。『方言文法全国地図』では、長野県内に、「雨ジャネーカイ」にあたる語形が、併用として複数地点みられるが、長野県松本市にはみられない。なお現在でも、「明日は、雨ジャネーカイ」のほかにも、場面によっては「明日は、雨ズラ」が使用可であるが、確信度が高く相手におしつけるような言い方であるためにあまり使用しない（松本市新村、1934年生まれ男性話者の内省）など、使い分けの実態もありそうであるが、表現法的な観点からの調査はこれからである。

（注２）　論者の言語経歴は、次の通りである。1955年～1972年　長野県松本市（旧市内）、1972年～1982年　東京都23区内、1982年～1986年　和歌山県海南市、1986年～1993年

奈良県奈良市、1993年～現在　長野県松本市（旧市内）。

（注３）　方言を研究する場合、何かそこに固定的な体系があるように誤解されることがある。少しでも方言研究の体系記述調査を行ってみると、方言の実態はそのようなものではないことがわかるであろう。「言語は、字（あざ）ごとに異なる」という言語地理学の基本的なテーゼがあるが、体系記述を行おうとする場合には、そうした前提に従えないことも出て来る。ひとつの字のなかでも、世代差や個人差があり、また、場合によっては生業の異なりによる社会差もあって、字すべての人が、まったく同じ言語（パロールは言うに及ばず、ラングであっても）を使用しているとはいえないのが実態である。（社会言語学は、こうしたことを調査目的のひとつとしている。）

現代日本語においては、地域における共通語化の影響が色濃くあり、とりわけ松本方言のように東京語と言語体系が比較的似ている方言にあっては、話者自身が「自分のことば」を明確に分別して識別することが困難な場合が多々ある。そのため、話者自身が気づいていないような差異は、訓練と経験を経た調査者が、注意深く場面を限定しながら調査することによって、方言的事実が明らかになってくることも少なくない。

終助詞においては、共通語の影響で、使用形式の内省にゆれが見られる場合がある。たとえば、「オレ、イクカ（私が、行こうか）」というように、終止連体形に「カ」が後接する表現が、最も自然でよく聞かれる松本方言であるが、方言場面でも「オレ、イコーカ（私が行こうか）」という、東京語的な志向形に接続した表現をまったく使用しないかというと、判断がゆれてくるのである。

「言語体系は、個人語のなかにしか存在しない」という考え方の解釈は、半世紀前であれば、「言語（ラング）には共通性があるので、個人語を体系的に調べれば、その共同体の言語（ラング）を知ることができる」という暗黙の了解にたった考え方であったが、現代では「言語（ラング）の共通性の範囲を特定することは困難であるため、体系調査に堪えるのは、個人語を対象とした場合でしかない。」という趣に変わってきたといえる。地域の複数の人々の言語生活を観察して、その話者の内省の確かさを確認することが必要なことはいうまでもない。しかし、話者を生え抜きに限定したとしても、そのように言う人が多い、というのが現状であって、全員がそのように言う、ということが少ないのが、現代の言語生活からみた実態である。

上記をふまえると、本論で述べることは、松本広域方言を仮設して示したもので、特定個人の言語体系調査をさらに行った場合には、多少異なった事実が現れる可能性もあることを記しておきたい。

（注４）「ン」と「イ」は、馬瀬良雄（1992）によれば、長野県中信地方に分布がある。両者の違いは、そこでは、次のように説明されていて、示唆に富む。「―イネはある判断に対して、相手の共感、同意を求める終助詞で、軽い敬意と親愛感をこめる。活用語の終止（―連体）形に接続する。」「―ンネは、活用語の終止（―連体）形に接続し、念を押し、余情を含む丁寧な断定を表わす。やはり、軽い敬意と親愛感をこめる。」「―ンネと―イネは意味が似ているが、―ンネは優しさの中にも断定的に相手に決めつける調子があるのに対し、―イネにはむしろ相手に判断をゆだねる口吻がある。だか

ら、―ドーダイネと相手に尋ねることはできても、―ドーダンネとは尋ねられない。」。こうした指摘は、本論で述べたような「ン」と「イ」の語義の違いからきていると考えるものである。

（注５）「ズラ」「ダ」を終助詞とすると、「ソー」「ヨー」「ミタイ」「ラシー」なども終助詞とする考え方が出て来るであろう。ただし、松本方言では、「ヨーダ」「ミタイダ」「ラシー」は、あまり使用されない。伝聞表現では、「？明日ワ、雨ダソーダ」ではなく、「明日ワ、雨ダッテイウワ」という「ダッテ」を用いた表現が一般的である。このことは、『方言文法全国地図』からも、確認される。

（注６） 村中淑子（2009）が記述する徳島方言のダは、動詞命令形、志向形にも後接するが、松本方言「ダ」は、動詞命令形、志向形には後接しない。徳島方言と松本方言「ダ」は、形態と意味の両面で異質である。

（注７）『言語学大辞典　第６巻　術語編』（亀井孝・河野六郎・千野栄一編、1996年、三省堂）による。国語学の文法論では、述体の句と喚体の句の別を立て、名詞文では「ダ」の有無による文の違いを重視してきたといえるが、ここでは、言語学の考え方に従う。

（注８）「で」は、「だ」の活用ではなく、接続助詞、格助詞、終助詞に分類する立場をとる。共通語において、「ね」「よ」には、繋辞としての働きはなく、話し手の判断も表さないとされることがあるが、本論では、別の分析の可能性を提示したい。共通語（の特に女性語）においても、「ね」「よ」は、話し手の主観的な評価のひとつとして、「これ、梅ね」「これ、梅よ」では、「これ」と「梅」の結び付き（命題部分）を提示するときの話し手の評価のありかたが、語義に含まれていると本論は考えるのである。

（注９） なお、共通語の「だ」についても、同様に考える。共通語では、「これ、梅ね」「これ、梅よ」「これ、梅か」「これ、梅さ」などのように、いわゆる繋辞がない文があるが、この場合、「ね、よ、か、さ」は、「だ」と同様、話し手の何らかの判断を担っていると考えられる。共通語では、「だ」が判断をにない、「ね、よ」などの終助詞は判断を担っていないと考えられているが、本論では、本文に示した松本方言の文法と同様に考える。

（注10） ちなみに、共通語における「で」「に」「だろう」は、「だ」の活用変化ではなく、別語と認める。

【参考文献】

井上優（1993）「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」―命令文・依頼文を例に―」『研究報告集14』国立国語研究所

井上優（1995）「方言終助詞の意味分析―富山県砺波方言「ヤ／マ」「チャ／ワ」」『研究報告集16』国立国語研究所

井上優（2002）「方言終助詞の記述研究のために」『日本語学』21−２　明治書院

江口正（2010）「大分市方言の終助詞「エ・デ」とその関連表現」『福岡大学研究部論集　A　人文科学編』10−７

沖裕子（1998）「全国方言一覧事典―長野県―」『月刊言語』32−１　大修館書店

沖裕子（2007）「各地方言からみる『方言文法全国地図』中部（長野・山梨）方言」『日本語学臨時増刊号　方言文法全国地図をめぐって』26-11　明治書院
沖裕子（2009a）「長野県」佐藤亮一編『全国方言辞典 CD 付』三省堂
沖裕子（2009b）「発想と表現の地域差」『月刊言語』38-4　大修館書店
沖裕子（2013a）「終助詞を用いた推量表現―談話論による松本方言の分析―」『人文科学論集＜文化コミュニケーション学科編＞』第47号　信州大学人文学部紀要
沖裕子（2013b）「談話論からみた句末音調形式の抽出」『国立国語研究所論集』5　国立国語研究所
沖裕子（2014）「方言にみる頼みかたの表現と発想」小林隆編『柳田方言学の現代的意義―あいさつ表現と方言形成論―』ひつじ書房
金水敏（1993）「終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』22-4　大修館書店
国広哲弥（1982）『意味論の方法』大修館書店
国立国語研究所（1989-2006）『方言文法全国地図 1-6』国立国語研究所
佐治圭三（1957）「終助詞の機能」『国語国文』26-7　京都大学
佐藤虎男（1976）「方言文末詞の記述―三重県鈴鹿市江島町の方言の文末詞―」『方言研究叢書』7　三弥井書店
佐藤虎男（1990）「大阪弁の文末詞ヤンカについて」『学大国文』33
渋谷勝己（2001）「山形市方言の丁寧語ス」『阪大社会言語学研究ノート』3
渋谷勝己（2003）「山形市方言における命令形後接の文末詞ナ・ネ・ヨ」『阪大社会言語学研究ノート』5
渋谷勝己（2004）「山形市方言の文末詞バーヨと対比して」『阪大社会言語学研究ノート』6
渋谷勝己（2005）「山形市方言のモダリティ形式「ッダ」」『阪大社会言語学研究ノート』7
渋谷勝己（2008）「山形市方言の文末詞ジェーヨ・ズ・バと対比して」『阪大社会言語学研究ノート』8
白岩広行（2008）「福島方言の伝聞表現トとスケ」『阪大社会言語学研究ノート』8
白岩広行（2011）「方言の推量形式における意味変化―談話的機能へ」『阪大日本語研究』23　大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
白川博之（1992）「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』77
冨樫純一（2004）「現代日本語終助詞研究文献目録」『筑波日本語研究』9
中村純子（2006）「長野県上伊那地方終助詞「ニ↑」の意味分析」『信州大学留学生センター紀要』7
日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 4　第 8 部モダリティ』くろしお出版
丹羽一彌（2003）「日本語「終助詞」の分類」『人文科学論集＜文化コミュニケーション学科編＞』第37号　信州大学人文学部紀要
丹羽一彌（2005）『日本語動詞述語の構造』笠間書店
蓮沼昭子（1992）「終助詞の複合形「よね」の用法と機能」
服部四郎（1950）「附属語と附属形式」『言語研究』15号　日本言語学会（服部1960所収）
服部四郎（1960）『言語学の方法』岩波書店
服部匡（1995）「終助詞の機能について―伊勢方言のニの用法の記述と「よ」との比較―」『言語学研究』14　京都大学言語学研究会
舩木礼子（2001）「山口方言の文末にみられるジャについて―断定辞のジャと文末詞のジャ―」『阪大社会言語学研究ノート』3
馬瀬良雄（1992）『長野県史　方言編　全 1 巻』長野県史刊行会
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版

宮岡伯人（2002）『「語」とは何か―エスキモー語から日本語をみる』三省堂
村中淑子（2009）「徳島方言文末助詞ダについて―文法的性質と意味―」『国際文化論集』41　桃山学院大学
渡辺実（1968）「終助詞の文法論的位置―叙述と陳述再説―」『国語学』72

（2014年10月31日受理、12月 3 日掲載承認）